

「かわさき宙と緑の科学館」開館 50 周年記念 PR 動画
「多摩区偉人伝～川崎市青少年科学館 元館長 若宮崇令篇～」テキスト情報

- ルーション 水と緑と学びのまち 多摩区
皆さんは、ご存知だろうか・・・
人と自然との調和を目指し、奮闘する人たちがいたことを・・・
今宵の偉人は・・・
- 若宮 市民とともに歩む博物館にしていくんだ。ということで、一生懸命やらせていただきました。
- ルーション いち公務員ながら、川崎市文化賞を受賞。
日本プラネタリウム協会会長や、複数の館長を勤め上げるなど、
数々の偉業を成し遂げた男、若宮崇令（わかみやたかのり）
- 上西 若宮さんとはとにかく人望が厚くて、いつも周りに人が集まっていました。
- ルーション 川崎の子どもたちに本物の星空を
- 亀岡 星と自然の調和を愛してやまない方ですね。
- ルーション 市民は博物館のパートナー
- 弘田 若宮さんの言葉というのは一人一人の職員の心の中に刻み込まれています。
- ルーション 星を知って人間を知る
- 若宮 私にとってプラネタリウムというのは、幸せに生きるためのツールなんです。
- ルーション その半生をプラネタリウムに捧げた若宮崇令
これは、世代を越えて受け継がれる、魂を繋ぐ物語である。
- ルーション 1943 年、三重県の津市で、崇令と命名された男の子が三重県の津市で誕生。
その後、藤沢市に移り、血気盛んな学生時代を過ごす、
大学を卒業後、1966 年に神奈川県へ入庁。
その 5 年後、川崎市青少年科学館が開館を機に川崎市へと移ることに。
当時の出来事を若宮さんはこう振り返る。
- 若宮 学生の頃は教員になろう。そういうふうになっていたんですけども、
卒業間際に、行く学校も決まっていたんですけども、
研究室の 1 年先輩がおりまして、
その先輩が神奈川県の青少年センターのプラネタリウムの開設をやっていたんです。
彼が私に「プラネタリウムの手伝いをしてくれ。」と言ってきたんです。
学校も決まっている、と言ったのだけれども、「学校へはいつでも出られるよ。
むしろ社会教育を見て、それから学校へ出て遅くない。
その方が社会教育も知っているいい先生になれるから、とにかく話だけでも聞きに来い。」
って言われて、じゃあ話だけ聞きに行くかって、
神奈川県の青少年センタープラネタリウムに行ったんです。
その時にプラネタリウムの主任をやっていた河原先生にお会いしまして、
熱意、熱い思い、それを聞かせてもらって、

卒業と同時に神奈川県青少年センターに就職しました。

ルージュン 若宮さんは科学館就任当初、自然関連のコンテンツを模索していた。それは、従来の科学館としての機能に博物館を足し算するようなもの。なぜ、そのような発想に至ったのか？

若宮 この青少年科学館は生田緑地というところに、建てられていたわけですがけれども、その当時はプラネタリウムのドームとプレハブ小屋の事務室があるだけの施設だったんです。でも私はこの生田緑地の自然っていうのは、都市の中で非常に貴重な、動植物とか地層だとかそういうものを通して自然について、もっともっと知ってもらいたい。自然が人間にとってどんなに大切なものか、というものも知ってもらいたい。ということプラネタリウムの解説をしながら思いまして、それで自然観察会をしたり教室を開いたりしていました。

ルージュン その思いが叶い、1983年、「多摩丘陵の四季」や「川崎の大地のあゆみ」など、4つのコーナーを設置した、展示室がオープン。展示室オープン当時の映像がこちら・・・

過去の動画ルージュン 向ヶ丘遊園駅からほど近い多摩区の生田緑地。川崎の自然がひと目でわかる展示室は、ここ青少年科学館の1階に、この春完成しました。シカや貝などの化石で分かる川崎の大地の歴史。多摩川はどこから流れ、どんな生物が住んでいるかを紹介するコーナー。まちにいる生き物や植物などを知るコーナー、鳥のクイズも楽しめます。

ルージュン プラネタリウムはもちろん、様々な展示物が見られるなど週末になると、多くの来館者が訪れ、大盛況を収める結果となったしかし、オープンから1か月後、ある問題が・・・

若宮 展示室が作られました。体裁は整ったんですよ、体裁は整ったけど中身がなかった。非常に私は危機感を持ちました。何かって言うと、博物館で一番大事なものは、資料です。標本です。データです。その蓄積が全然ないまま博物館になってしまったので、結局は職員がやるしかないなと思ったのだけれど、少ない職員で川崎市全域のいろいろな分野を調査し、資料を集めることはできませんよね。それでどうしたらいいだろうかって考えて、そうだと市民の力を借りよう。ということで川崎の地域の自然調査という、あの方式を考えだしました。

ルージュン 同年、川崎市域の自然を調査・記録するべくかわさき自然調査団が結成。当時、若宮さんと調査活動を共にしていた上西さんは・・・

上西 私の子ども、2人いるんですけども、とても虫が大好きで、ここの自然教室に通っておりました。そうしたら1年ぐらい経ってからか、若宮さんが自然調査を始めたいんだけど、やりませんかということで、いろいろお世話になっているので親子で参加します。ということで、まず初めのタンポポ調査に参加させていただきました。みんな楽しくて、半分ハイキングみたいな感じで、地図片手にプロットされる所に行くと、そこにタンポポがあるかないか、それからそれは西洋タンポポなのかカントウタンポポなのか調べるというだけなんですけれども、やってみると結構はまっちゃって楽しかったです。みんな楽しかったと思います。

- ルージュン かわさき自然調査団の活動は植物、野鳥、昆虫、動物など多岐にわたり、最盛期には約 140 人も市民が活動。その結果、約 6 万点の資料を収蔵することに成功し、現在は、科学館の 1 階で展示物を見る事が可能に。
- 若宮 市民が博物館活動に有機的に関わるってようなことは、その当時少なかったです。市民の皆さんに対しては本当にもう感謝しかないんです。ただ、私は苦勞したのは、通常はプラネタリウム業務が主なんです。その合間にその自然調査をやらなくてはいけなかった。それからもう 1 つ。職員の養成です。科学館に来る職員は事務系の職員なんですね。その事務系の職員に天文、それから自然のことに精通したそういう職員になってもらわなくちゃいけない。そういう職員養成にずいぶん苦勞しました。調査をしてくれるその市民の姿、熱心さ、それから優秀さそれを見てですね、私は市民はそういうお手伝いじゃないな、博物館のパートナーだ。そういう風に思ったんですね。
- ルージュン そして多忙な日々を送り、科学館職員として仕事にも馴染んできたある日。1 つの運命的な出会いとなる電話が若宮さんの元に・・・
- 若宮 校長先生から、プラネタリウムにとっても興味を持っている子どもがいるので、今度行かせるから面倒を見てやってほしい。という電話がありまして。
- ルージュン そう、それは後にドラマ化にもなった原作『プラネタリウムを作りました～七畳間で生まれた 4 1 0 万の星～』の著者
- 若宮 しばらくしたらやってきたのが、大平君だったんです。プラネタリウムを見て私のところへ来て、いろいろ質問をしたもんですから。この子だなというのはすぐ分かりました。
- ルージュン 日本イノベーター大賞優秀賞、文部科学大臣表彰 科学技術賞、IPS TECHNOLOGY & INNOVATION AWARD など、数々の賞を受賞した日本が世界に誇るプラネタリウムクリエイター。そんな大平さんが、夢を実現するきっかけを与えてくれたのは若宮さんだという。
- 若宮 大平君自身が一番興味を示したのは、やはり星をどうやってシャープに映し出すか、ということに興味を持っていましたね。星のこととかプラネタリウムで話した内容のことを質問にくるのが多いんですけども、彼はそうじゃなくて、プラネタリウムの電球の球は何を使っているの？ 星はどうやって映し出すの？ それからモーターは何を使ってるの？ 夕焼けの投影機の仕組みはどうなっているの？ そういうプラネタリウムのメカのことばかり聞いてくるそういう子どもでした。学校教育は間違っただけをもし言っても、「ごめんね昨日こんなこと言ったけど、こうだったよ」って先生は訂正できるんです。子どもに。だけど、社会教育は一過性のものです。その子どもがもうそれで来ないかもしれない、

ですから手抜きをしないという風にずっと思っていましたものですから、一生懸命ちょっと難しいことも説明してあげました。そして最後に、彼にここへ来てごらんと言って、プラネタリウム解説台へ連れて行ってあげて、「このダイヤルを動かしてごらん、ほら、こうやって動くよ。」と、「動かす。」そういう体験をさせてあげたんですね。そうしたら、彼は、後からお母さんが言っていましたけど、その日、すごく興奮して家に帰ったそうでした。すごいプラネタリウムを自分で作ってみたいんだ、ということを何か言ったというふうに聞いております。

ルーション　そして、開館から約 30 年が過ぎた 2012 年
川崎市青少年科学館の全面リニューアルに伴い、大平さんが手掛ける、光学式投影機と高解像度のデジタル投影システムを組み合わせることによって実現した世界に 1 つしかないプラネタリウム「メガスター III FUSION」が導入され、大きな話題をさらった。

若宮　川崎市ではプラネタリウムはこういう生田緑地というような不便なところではなくて、駅前のもっと足場のいいところに科学館を移したらどうか、そういう話もあったんです。けど私は一歩出て自然観察ができるようなフィールドを持っている、そういう博物館は日本探してもそんなにないわけです。それとプラネタリウムはやっぱり星空のモデルです。本物の星空へ誘う一つの手段でもあるわけです。ですから、生田緑地というのは、川崎では本物の星が見える本当に数少ない見られるいい場所なんです。ですから、駅前を持っていくとかというのではなくて、この生田緑地にあることが非常に重要だっていうふうに思って、ここでリニューアルするという基本計画とか基本構想を作り、っていうようなことを、私はこだわってやらせてもらいました。

ルーション　12 月某日、取材班は、若宮さんの痕跡を辿るため、かわさき宙と緑の科学館を訪れた。

弘田　こんにちは。よろしくお願ひします。

ルーション　かわさき宙と緑の科学館にあるプラネタリウム
その最大の特徴は、解説員による「生解説」
他の都市部では予め録音した物を流すことが多いが、
川崎市では一貫してお客様に向けて直接話すのを心がけている。
その理由は・・・

弘田　ただ星を見るとか教えるということではなく、お客さんと一緒に星空を見上げる。ですから、お客さんと同じ視点で、お客さんとコミュニケーションを取りながら星空を見ることが大切だと思っています。子どもが多ければ優しいお話をしようだったり、やっぱり一つの星座にしてもいくつものネタをそれぞれ持っていて、じゃあ今日はどの話をしようとか、子どもが多ければこのお話をしよう、大人が多ければもう少し専門的な話をしようとか、そういった具合に自分の引き出しをうまく使いながらお話をしています。

若宮　私は生解説にこだわらせてもらいました。
スタートのボタンを押して終わったら明るくつけるような、
それだけの解説者だったらやりがいは感じられない。
テープで流す。それはそれなりにいいとは思いますが、

でもプラネタリウムの解説の場合は解説者とお客が一体になれるような、
そういう解説、それが生解説しかできないなという風に思っていたからです。

ルージュン 若宮さんが科学館職員を志すきっかけとなった河原さん。
そこから、若宮さん退任後も受け継がれている教えが、
『時間を守ることはお客様との契約』

弘田 お客様がプラネタリウムを見たあと、何か予定があるかもしれない。
もしかしたら投影が1分2分と延びることによってバスに乗れないとか、
あるいは新幹線に乗れない、飛行機に乗れないということがあるかもしれない。
そういったこともあるのでお客さんの予定のことも考えて、まずは時間通りにお話をする。
何しろ今回は45分なら45分というふうにお客さんと約束をしてお話をするわけですから、
しっかりそれを守って時間どおりにお話をしなければならぬというふうに聞いています。

ルージュン 当時、仕事面で若宮さんを良く知る亀岡さんは・・・

亀岡 まずプラネタリウムに関してはとにかく時間がぴったりで。
当時45分間の投影だったんですけど、本当に45分間ぴったりで終わるんですね。
私が新人の頃からそのあたりがとってもとても難しくて、
とにかく長引いてしまったので、そのあたりはとっても厳しい方でした。
1年目の時にちょっと足の骨を折ったことがありまして、
足の骨を折っただけだと、しゃべるのはポイントを使いますので、
足を折っても出ると言ったんですけど、足を折ったためにマイクとの位置関係が、
いつもと違うので投影はさせられないというふうに言われまして。
そういうところはとってもとても仕事には厳しい方だなと、いう風には思いましたね。

弘田 例えば夕焼けひとつをとってもいつでも同じ色ではなくて、
季節であったり天候であったりによって色合いが違ってきます。
夕暮れからだんだんと空の明るさ、色合いが変わっていく、
そういったところをやっぱり自分の目で見て、
それを再現できるように機械を操作しなければいけないというところがあります。
やはり機械が作り出す星空とは言っても、
自然に忠実であるということが大切だと思っていますので、
自分で実際に星空を見てその体験に基づいて、星を再現してお話をする、
それが大事だと思っています。

ルージュン 若宮さんが職員として奮闘していた1980年代。
光通信・発光ダイオードなど、日本の科学技術は大きく発展を遂げていた。
しかし、当時の日本にはプラネタリウムと呼ばれる物は少なく、
ブームとなるにはまだ遠い時代。
そんな時、若宮さんが積極的に取り組んだのが「学習投影」。
なぜ、「学習投影」を思いついたのか？

若宮 幼稚園、保育園の子どもたちも生田緑地に来るんですよ。
遠足で1年生も2年生も、各学年来るわけです。そういう子どもたちにみんな、
星空の勉強も生田緑地に来た時にはしてもらいたいというふうに思いました。
幼児番組を作り、小学校の学年別の番組を作って、
学校にいるような雰囲気でも勉強できたらいいなというふうに思って、
ドームの裾に校庭から見た景色 川崎市内の学校全部の景色を撮って歩いて、
そしてその学校が来るとそれをドームの裾に映し出して、そして勉強してもらおう。

子どもにもただ聞くだけではなくて、学習に参加できるような、参加型の投影いうものを一生懸命やらせてもらいました。

ルーション 40年以上、市民と共に歩む科学館の発展に寄与した若宮崇令
その道のりは、多くの人に支えられた結果だという。

若宮 一緒に汗を流して、そして文句も言わず私を支えて励ましてくれた、
大勢の市民の皆さんに恵まれたということが、本当に今思うと良かったな、
恵まれたなという風に思い、本当に、ただただこの四十年間、感謝・感謝・感謝の気持ちだけです。

ルーション 最後に、若宮さんは取材班に今後の展望についてこう語った・・・

若宮 これから科学館は60周年、80周年、100周年に向けて、ますます発展していくと思います。
でもどんなにデジタル化の時代、AI化が進んだとしても、
市民に支えられ、そして市民によって高められる、市民とともに歩む市民のための博物館である、
ということはこのままずっと続けていっていただきたい、そういうふうに私は思います。

ルーション 2004年に科学館を退任してからも、次の世代へと受け継がれていく若宮さんの意志。
2021年に50周年を迎えた「かわさき宙と緑の科学館」
現場の職員たちは、どのような未来を描いているのか。

渡辺 私自体がこの科学館にすごいちっちゃい頃から通ってまして、
建て替えの前の科学館と、建て替わった後のメガスターが入った後の科学館にいたので、
こういうふうに色々な時に、ちっちゃい頃から、それから中学生高校生の皆さんにも
ここに通っていただいて、その先にもしかしたら、こういう科学館で働きたいなと
いうふうに思えるような、そういう科学館を目指していけたらなと思っています。

内藤 偉大な先輩方がたくさん気づいてくださったこの伝統を守りつつ、
そしてこれから時代変わっていきますけど、やはり市民の方と一緒に歩いていく、
そして僕らも新しいことをいろいろと考えながら、
どんどんと発展させていきたいなと思っています。

藤田 科学館というのは知識とか知見とかそういったものを得るためにいらっしゃる、
そういう方ももちろんいらっしゃると思うんですけども、
当館それだけではなくて、やはり来た中で何かしら自分たちがどういうことができるのか、
ということを知るような、そしてそれが自分の中で意識できるような環境を提供できる、
そういった施設であり続けたいというふうに思っています。
そのためには、当館だけのスタッフではなくて、いろいろな市民の方との協働を通じて
当館の運営というものをこれからも進めていながら、
魅力ある施設にしていかなければというふうに思っています。

ルーション 市民と共に歩む博物館を目指し、激動の時代を駆け抜けた若宮崇令
夢実現の為、奮闘する姿が、そこにはあった。

若宮 人間の寿命はせいぜい100年です。太陽系が生まれて太陽が生まれてからも50億年。
地球が生まれて46億年です。やがて太陽は滅びます。地球もその前に滅んでしまいます。
今思うと、太陽系、そして地球は今一番安定しているいい状態の時です。
その時に、そのわずか100年ぐらいの、ほんの一瞬の生命しか生きることのできない人間同士が
今この地球上に生まれ合わせているということ自身、
これはもう奇跡としか 言いようがないぐらいのことだと、いうふうに私は思うんですね。

そんな人たちが、今この時にケンカをしたり、戦争したり、殺し合ったり、そんなことをしてる場合じゃないよ、っていうことを、宇宙を知ることによって気づく人が多くなればなるほど、平和な地球が訪れるというふうに思っています。ですから、宇宙を知るということは、私たち人間を知ること。そして人間の私たちの生き方を知ることにも繋がるというふうに思っております。ですから私はプラネタリウムを通じて、そういう風を感じてくれる人は、一人でも多くなってくれるといいなと思って星の話をしたり、人と接したり、子どもたちと接したりさせてもらっております。

ルージュ 今日、若宮さんはプラネタリウムを通じて、世界平和を訴え続けている。